

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所

162-0805 東京都新宿区矢来町 65

電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175

発行者 総主事 司祭 矢萩新一

「いのちと真の平和を大切に」

— いま、懸念されること —

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

「あなたには、私をおいてほかに神々があってはならない。」

(出エジプト記20:3、聖書協会共同訳)

連日の報道でも問題になっている、統一協会と政治の関係、安倍元首相の国葬のことを思う時、冒頭の聖書の箇所が思い浮かびます。特定の逝去者を英雄扱いして神格化してしまうような、かつての太平洋戦争のときの天皇の神格化や戦死者を英霊としてまつ靖国神社問題にもつながると懸念します。また、再臨のキリストだと自称して人々をだまし、多額の献金をむさぼり、人々を傷つける教祖を持つ宗教を政治が利用しようとしたことが問題ではないのでしょうか。教会で政治的なことを語らないでほしい、もっと大切な聖務に集中してほしいというお声をいただきますが、政教分離という考え方は、かつての国家神道のもとに戦争へと邁進した過去の反省に立ち、政府が特定の宗教を強要したり優遇したりしないようにするという考え方で、宗教の信仰に基づいて、すべてのいのちを大切にするという視点から、声を発することを制限するものではないことを覚えたいと思います。また、聖公会はパリッシュ(地域にある教会)という概念を大切にしています。教会が置かれた地域のすべてのいのちに関わり、ケアするという考えです。教会の内外、福音か社会問題かという二者択一の信仰ではないことは、他の教派の教会でも共通の認識だと思います。

この場をお借りして再度、「世界平和統一家庭連合(旧世界基督教統一神霊協会:以下、統一協会)」に関する注意喚起をさせていただきます。今年7月号の管区事務所だよりやHPでお知らせしましたとおり、正体を隠して勧誘や活動を行ない、靈感商法や多額の献金により家庭崩壊させられてしまう恐ろしさを秘めた団体が統一協会です。報道などでは統一教会・「教会」と略されていますが、旧名称は世界基督教統一神霊協会(Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity)ですから、「統一協会」が正しい略称表現だと思います(キリスト教

口会議・プログラム等予定

(2022年8月25日以降・前回未掲載分)

9月

- 2日(金) 青年委員会 [Web]
- 8日(木) 宣教協議会実行委員会 [Web]
- 11日(日) 青年委員会 [Web]
- 12日(月) ハラスメント防止・対策担当者打ち合わせ [Web]
- 16日(金) 宣教協議会実行委員会 [Web]
- 20日(火) 正義と平和・憲法プロジェクト会議 [Web]
- 22日(木) 主事会議 [管区事務所]
- 27日(火) 管区共通聖職試験委員会 [Web]
- 29日(木) 宣教協議会実行委員会 [Web]

10月

- 1日(土) ハラスメント防止・対策担当者会 [Web]
- 2日(日) 青年委員会 [Web]
- 4日(火) ~ 6日(木) 主教会 [仙台]
- 9日(日) ~ 11日(火) 在日韓国出身教役者修養会 [大阪]
- 10日(月・休) 聖公会生野センター30周年記念礼拝 [大阪]
- 12日(水)・13日(木) 人権セミナー [草津+Web]
- 14日(金) 人権問題担当者会 [Web]
- 17日(月) 宣教協議会実行委員会 [管区事務所+Web]
- 17日(月) 常議員会 [管区事務所]
- 20日(木) 神学教理委員会 [Web]
- 21日(金) 正義と平和・原発問題プロジェクト会議 [Web]
- 23日(日) 青年委員会 [Web]
- 25日(火) セーフ・チャーチ WG [Web]
- 26日(水) 正義と平和・憲法プロジェクト会議 [Web]

(次頁へ続く)

† 10月27日(木) は青山墓地清掃および墓参の祈りのため、管区事務所はお休みとなります。

※管区事務所の就業時間

当面の間、新型コロナウイルス対策のため、就業時間を平日(月曜日~金曜日) 10:00~17:30 といたします。

界ではこの略称を意識的に使用しています)。改名された世界平和統一家庭連合も「教会」と自称していますが、「Church」ではなく、1954年に文鮮明が韓国で起こした新興宗教・カルト宗教で、聖書を独自理解した『原理講論』を教典として、自分こそが真のメシア・救い主だと主張しています。強迫観念を植え付けて人を束縛する教えは、キリスト教の愛の教えとは相容れないものです。

ある退職された司祭から洗礼を受け、ユニバーサル福音協会(統一協会の友好団体)の牧師になり、名刺に「ユニバーサル福音教会(聖公会)」と記載している方がおられますが、日本聖公会の教会ではありませんし、人をだます表現だと判断します。また、世界平和〇〇集会など、そうとは知らずにイベントに参加し、後から聞くと統一協会の関連のものだったり、ホームページに挨拶文が掲載されていたりする方の事例もあります。各教会に『カルトって知ってますか?』日本基督教団 カルト問題連絡会発行の冊子をお送りしていますので、今一度ご確認、ご活用ください。

(前頁より)

11月

- 4日(金) 教役者遺児・建築金融資金運営委員会〔管区事務所+Web〕
- 4日(金) ～5日(土) 拡大青年担当者の集い〔東京〕
- 9日(水) ～10日(木) 宣教協議会・会場下見〔清里〕
- 11日(金) 正義と平和委員会〔管区事務所〕
- 29日(火) 正義と平和・沖縄プロジェクト会議〔Web〕

<関係諸団体会議・他>

- 10月3日(月) NCC 役員会〔Web〕
- 7日(金) アジア太平洋地域ネットワークミーティング〔Web〕
- 18日(火) NCC 役員会・常議員会〔Web〕
- 19日(水)・20日(木) 日本キリスト教連合法人事務・会計研修会〔Web〕

□各教区**東北**

- ・第106(臨時)教区会 日本聖公会東北教区主教座聖堂 仙台基督教会 礼拝堂
2022年11月3日(木) 13時～17時 議題:
東北教区主教選挙
- ・第107(定期)教区会 2022年11月23日(水・祝) 9時～17時 盛岡聖公会 礼拝堂/アートホテル盛岡

北関東

- ・第90回(定期)教区会 2022年11月23日(水・祝) 13時～17時 志木聖母教会

中部

- ・第94(定期)教区会 2022年11月23日(水・祝) 10時～16時
【愛岐伝道区】主教座聖堂名古屋聖マタイ教会
【長野伝道区】・【新潟伝道区】調整中

京都

- ・第118(臨時)教区会 2022年9月24日(土) 14時～17時、日本聖公会京都教区 主教座聖堂(聖アグネス教会)

神戸

- ・第92(定期)教区会 2022年11月23日(水・祝) 9時～16時半 神戸教区主教座聖堂、および各教会会場(リモート開催)

沖縄

- ・聖職按手式 2022年11月3日(木) 10時半 日本聖公会沖縄教区 主教座聖堂 三原聖ペテロ聖パウロ教会 司式:主教 ダビデ上原榮正 説教:司祭 洗礼者ヨハネ山本眞 執事按手志願者:聖職候補生 ウリエル仲宗根遼祐

□神学校**ウイリアムス神学館**

- ・2022年度体験入学 10月4日(火)～6日

📖 管区・出版物案内**・『2023年度 教会暦・日課表』**

2022年10月1日発行 頒価300円(税込)

お求めはバイブルハウス南青山TEL 03-3567-1995

またはお近くのキリスト教書店にお願いいたします。

(木) 内容: 授業への参加、特別講座、懇談会ほか

† 逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

主教 ヨハネ古本純一郎(神戸教区・退職
主教および日本聖公会第16代首座主教)
2022年8月30日(火) 逝去 (88歳)

* お詫びと訂正

『管区事務所だより第377号』15頁に掲載されている「沖縄週間／沖縄の旅 Webプログラムに参加して」の筆者(北関東教区大宮聖愛教会信徒)のお名前に誤りがありました。お詫びして以下のように訂正いたします。
(正) 田小山和歌子 (誤) 田小和歌子

《人事》

中部

司祭 テモテ島田公博 2022年5月31日付 長野聖救主教会、新生礼拝堂における主日礼拝等への協力の任を解く。

主教 ナタナエル植松 誠(退) 2022年9月1日付 長野聖救主教会、新生礼拝堂において主日礼拝等への協力を委嘱する。(任期: 2023年3月31日まで)

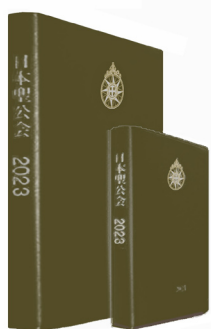
《教会・施設》

大阪聖三一教会(大阪) 2022年9月19日 礼拝堂聖別式、会館・牧師館祝福式

和歌山聖救主教会(京都) 2022年9月23日 礼拝堂聖別式

□ 「代祷表 2022年」について

ACP(Anglican Cycle of Prayer)発行の代祷表(翻訳版)は、『管区事務所だより』の同封物として奇数月にご送付させていただいておりましたが、「代祷表 2023年1月、2月」は『管区事務所だより』8月号が休刊のため9月号に同封いたします。資料データは仕上がり次第、管区事務所のHPにもアップロードいたしますので、管区事務所のHPからダウンロードし、ご活用いただけますと幸いです。ご理解のほど、よろしくお願いいたします。 管区事務所



☆日本聖公会
管区事務所責任編集

『聖公会手帳』 2023

各教区事務所・教務所の協力のもとに準備中!

10月中旬発行

大判型 2,200円
ポケット版 1,200円
(税込)

ご予約はお早めにバイブルハウス
南青山(03-3567-1995) またはお近
くの書店まで!

- ✿ 読者アンケートからの利用者の声を誌面に反映。
- ✿ 2023年度 教会暦・日課表を完全収録。
- ✿ 祈りのページを大幅に増補。

(写真はイメージです)

特集 / 第15回ランベス会議を終えて

2022年ランベス会議に出席して

—アングリカン・コミュニオンの多様性と豊かさを実感—

日本聖公会 首座主教 ルカ 武藤謙一



第15回となるランベス会議は7月26日(火)～8月8日(月)までカンタベリーのケント大学を主会場に開催されました。当初は2020年に開催予定でしたがCOVID-19により2年間延期され(この間2021年以降主教たちはオンラインで学びと分かち合いを続けてきました)、今年の開催となりました。

正確な参加者数は公表されていませんが、約650名の主教と450名の配偶者が参加しました。1998年には11名、2008年には18名だったという

女性の主教は、今回は98名でした。

日本聖公会からは、笹森田鶴主教(北海道)、高橋宏幸主教(北関東管理・東京)、入江修主教(横浜)、西原廉太主教(中部)、西原美香子さん、小林尚明主教(神戸)、小林恵子さん、上原榮正主教(沖縄)、上原百子さん、武藤謙一主教(九州)、武藤和美さん、通訳としてポール・トルハースト司祭(神戸)、市原信太郎司祭(中部)の13名が出席しました。

ランベス会議のためにお支えくださり、お祈りくださった皆さまに心から感謝申し上げます。



(写真・カンタベリー大主教を囲んだ日韓の主教たち)

礼 拝

ランベス会議のチャプレン団がすべての礼拝を監修し、また会場内にはチャペルが設けられており、いつでも静かに黙想や祈りができるように配慮され、また参加者は少なかったですが6時30分から朝の祈り、21時30分から夕の祈りが献げられていました。

2日・3日目の主教たちのリ

トリートでの聖餐式、開会礼拝、閉会礼拝の聖餐式はカンタベリー大聖堂で行なわれました。また期間中4日目から10日目まで主日を除いて行なわれた聖餐式、夕の祈りは管区ごとに司式を担当し、その国の言語で詩編が唱えられ聖書が読まれ、その後5分程度のその管区の働きを紹介するビデオが上映され、多様な働きを知る機会となりました。礼拝音楽についても礼拝音楽に造詣の深い司祭たちが中心となった音楽チーム、またカンタベリー大聖堂クワイヤーなどが奉仕してくださいました。

8月6日は広島原爆記念日でしたので、チャプレン団に代祷で広島、長崎の原爆犠牲者のため、また核兵器廃絶のため祈ってほしい旨申し入れ、当日の朝の聖餐式、夕の祈りの代祷に加えられました。また当日の全体会議の冒頭、カンタベリー大主教は広島、長崎の犠牲者を覚えて2分間の黙祷を呼び掛け、参加者全員で黙祷がさげられました。



(写真・日本聖公会からの参加者)

聖書の学び

今回のランベス会議に選ばれたのはペトロの手紙Iです。主教たちは二日間のリトリートで5回に分けて講話を聞き黙想するように促されました。また期間中は主日とランベス宮殿訪問日を除き、一日のプログラムは聖書の学びと分かち合いから始まり、カンタベリー大主教の講話の後、6人～7人の小グループに分かれ、用意された設問をもとに分かち合う時間がもたれました。この小グループは期間中同じメンバーであり、ランベス・

コールについてもこのグループごとに話し合いがなされました。

カンタベリー大主教は、この手紙が小アジアの各地にいる寄留の民となり、迫害を受け困難の中にある信徒に送られたものであり、現代社会のなかで多様な課題を負いながら生きるキリスト者にとって示唆に富んだ書物であるとして今回の会議のテキストに選んだことを強調していました。

全体会議、ランベス・コール

(ランベスからの呼びかけ)

今回のランベス会議のテーマは「神の世界のための神の教会」“God’s Church for God’s World”です。このテーマのもとに、全体会議では、①「宣教と伝道」、②「和解」、③「セーフ・チャーチ」、④「聖公会のアイデンティティ」、⑤「和解」、⑥「環境と持続可能な開発」、⑦「キリスト者の一致」、⑧「ホスピタリティと寛容さ(他宗 教間関係)」、⑨「弟子であること」をテーマに、それぞれの担当者たち(主に各ランベス・コールの起草委員の方々)が発題されました。

それぞれの発題を聞いた後に、「ランベス・コール」(ランベスからの呼びかけ)の文章が起草委員会より提示され、小グループごとに意見を述べ合い、その場では幾つかのグループの意見を聞き、最終的には各グループの意見を委員会に提出しています。ランベス・コールとして提案され、検討されたテーマは、①「宣教と福音伝道」、②「セーフ・チャーチ」、③「聖公会のアイ



(写真・全体会議のひとコマ)

デンティティ)、④「和解」、⑤「人間の尊厳」、⑥「キリスト者の一致(エキュメニカルな関係)」、⑦「宗教間関係」、⑧「環境と持続可能な開発」、⑨「弟子であること」、⑩「科学と信仰」です。西原廉太主教はランバス・コール「科学と信仰」の起草委員の人であり、8月6日に「科学と信仰」について記者会見に出席し、広島原爆記念日であること、唯一の被曝国また東京電力福島第一原子力発電所事故による被曝国として、核のない世界を求める日本聖公会の立場を説明し、オンラインで参加している記者からも質問があり注目を集めました。

今回のランバス・コールで最も注目されたのが「人間の尊厳」に関するものでした。直前にランバス会議事務局から共有された原案では「1998年ランバス会議の決議1・10」(男女の結婚が正統な結婚であるとする決議)以外の立場を認めないという内容になっていたことに対して、アメリカ、カナダの主教たち、さらにウェールズの主教会からも懸念の声明が出され、一部、起草委員からも起草委員会原案にはこのような表現はなかったとの指摘もあり、結局、修正案が再提出されました。また同性婚に反対の立場の主教たちも別の決議の提案を準備していたようです。「人間の尊厳」が協議される前に、カンタベリー大主教は、1998年ランバス会議の決議1.10が今でも有効であると認めつつ、同時に複数の管区においては神学的考察と受容のプロセスを経て同性婚を認めていること、またこの課題を巡って対立があることを明らかにし、このコールについては賛否を問わず、今後も議論を継続していくと説明し、この課題については賛否を問うことをしませんでした。今回ナイジェリア、ウガンダ、ルワンダの主教たちが参加しなかったのもこのことが理由と聞いています。また同性愛を公言している主教たちが参加していることに抗議し、陪餐を拒否する主教や配偶者たちもおり、そのことに心を痛めた主教たちも少なくありませんでした。

こうした現実も踏まえて、カンタベリー大主教は、最後の講演で、宣教の5指標に言及し、ア

ングリカン・コミュニオンは、それぞれの課題に取り組みを通して神の愛をこの世に示していくこと、また多様性を尊重しながら、神の世界のための神の教会として共に歩み出そうと語られました。

オプションのセミナー・プログラム

期間中3回のオプションのセミナーが用意され、また夜には多様なプログラムが準備されていました。小林尚明主教は「御国が来ますように“Thy Kingdom Come”」セミナーで、発題者の一人として日本聖公会の取り組みを報告されました。また「セーフ・チャーチ」については全体会議のテーマの一つでしたが、セミナーとしても3回用意されておりその重要性を感じました。ロンドン在住の日本人への伝道活動で用いられているフレッシュ・エクスプレッションズについて、日本の参加者たちに紹介するプログラムもあり感謝でした。女性の主教たちの夕食会では笹森田鶴主教がスピーチし、参加した主教たちに大きな感動を与えたと伺っています。笹森田鶴主教は最後の全体会議でカンタベリー大主教のインタビューに答える4名の一人にも選ばれましたが、東アジアで最初の女性の主教として参加者たちの注目を集め、今回のランバス会議のヒロイン的な存在でした。

言語について

主会場とカンタベリー大聖堂ではフランス語、スペイン語、ポルトガル語、日本語、韓国語、スワヒリ語、ジュバ・アラビア語、ビルマ語に同時通訳され、全体会議、基調講演、聖書の学び、聖餐式、夕の祈りは各言語で聞くことができました。また会議資料、礼拝式文も各言語に翻訳されたものが用意されていました。日本語についてはポール司祭(神戸)と市原信太郎司祭(中部)の他に4人のプロの通訳者がおり、グループでの協議にも奉仕くださいました。また英国聖公会信徒の友紀・ジョンソンさんもいろいろな場面で献身的にサポートしてくださり、わたしのように語学力の乏しい者もあまりストレス感じること

なく参加することができました。

終わりに

今回初めてランベス会議に出席しましたが、アングリカン・コミュニオン多様性、豊かさを実感し、国や言葉、文化など違いはあっても共に祈り、聖書を学び、食事をし、分かち合う家族であることを強く感じました。特にチャペルやカンタベリー大聖堂の地下聖堂で静かに祈り黙想する主教たちの姿に励まされました。アングリカン・コミュニオンはセクシャリティを巡って根深い対立もありますが、それでもなお粘り強く対話を重ね、神の世界に仕える教会、神の家族として共に歩もうとしています。

日本聖公会は小さな管区ですが、世界の家族の一員として日本での宣教・伝道に励む思いを新たにしました。

今後、「ランベスからの呼びかけ」の正式な文

書が届くことでしょう。世界の聖公会が取り組もうとする宣教課題として受け止め、日本聖公会としてさまざまなレベルで分かち合いたいと考えています。



(写真・閉会礼拝で旧約聖書を朗読する小林恵子さん)

第15回ランベス会議を終えて

第15回 ランベス会議から思うこと

2022年7月27日、ランベス会議が始まりました。しかし実際には、ランベス会議の約1年前から、オンライン会議が行なわれていました。内容は、聖書の学びと各教区の状況の分かち合いでした。パソコンを通しての顔と顔を合わせたの会議ですので、本会場でのいきなりの出会いとは違い、親密さをもったランベス会議になったと思います。

こんなことがありました。ヒースロー空港からランベス会議の開かれたケント大学について、会議の前夜のことで。ランドリーを覗きましたら、オンライン会議で知り合った主教さんと出会い、洗濯機の使用法を教えてくださいました。こんな出会いの中にもカンタベリー大主教ジャスティン・ウェルビー師の今会議への熱い思いを感

沖繩教区 主教 ダビデ 上原榮正
じました。

2日目7月28日、ジャスティン大主教の基調講演がなされました。第15回ランベス会議のテーマは、「神の世界のための神の教会」です。講演では、第1ペテロの手紙について言及し、そこから現代社会の中で教会のなすべき役割、希望を与えることについて語られました。「希望」が、会議全体を貫いていました。

オンライン会議でもランベスでも毎日、Iペテロの手紙を学びました。Iペテロの手紙が取り上げられた理由は、読み方を変えようとの意図からでした。Iペテロの手紙は、皇帝や権力者たちに都合の良いことが書かれています。実際に教会も、Iペテロの手紙により国家や力ある者たちを擁護し、弱い、貧しい、小さくされた人々に服

従を強い、抑圧してきた歴史があります。

聖書が富者と貧者、自由人と奴隷などの分断に利用されてきました。ジャスティン大主教は、今もそれがあると語ります。ペテロの手紙が取り上げられた意図は、分断された世界で存在が認められなかった人々に光を当てることでした。

私は8月2日のIペテロ2:13-3:22で、ジャスティン大主教が「抵抗と回復」をテーマとして語られた時、強くそのことを感じました。教会はペテロの手紙を、奴隷制、専制政治、植民地制度、暴力などを肯定し、権力者や国家の悪事の正当化のために用いてきた。しかしペテロは手紙の中で奴隷、女性など人間としての存在が認められなかった人々を取り上げることで、彼らを見えるようにした。神の前に、皇帝も自由人も、奴隷も女性も同じ人間だと、神のまえでは等しい存在として浮かび上がらせた。

今日まで誤って解釈されてきたのは、「ペテロの手紙」を皇帝や権力者らが読んだ時、キリスト教の布教への障害がないように、注意深く、慎重に手紙が書かれたからだ。大切なことは、社会的に低く、小さく見えない存在だった奴隷や女性を光の中に照らし出したこと。皇帝も自由人も奴隷も女性も、神の前に同じ人として立たせたことだ。一と述べられ、今まで権力者や力を擁護してきたペテロの手紙の読み方を変えようと呼びかけられました。

私はこの話を聞くために、このランベス会議に

召されたように感じました。その後、ジャスティン大主教は、主教職は権威と力を持っている。それは良い方向のために使われるべきで、共有するほどに力は増すと語られました。これは権威、権力、力を持つ全主教への警告でもあります。そして、最後に希望による一致、これがランベス会議の目的だと語られました。

最初の日、「あなたにとって希望とはなんですか。」という質問がありました。今日、多くの問題を抱えています。地球温暖化、貧困、災害、戦争、飢饉、飢餓等などです。多くの人がビデオの中で希望について語っていました。全部を覚えてはいませんが、共通して言えることは、「変化」だと思いました。

希望とは、今ある状況よりも、もっと良いものへ、より良い方向へと向かわせてくれる変化のこと、これが希望だと思いました。教会には希望があります。何故なら、神さまがおられるからです。そして、希望を求めて教会を訪れる人々を失望させたり、裏切ることがないように、誰にとっても安心、安全な場所である必要があるのです。

残念ながら私はコロナに感染し、後半は参加できませんでした。ランベスを終わるにあたり感じたことは、会議は終わるが、これから始まりだということです。教会が希望溢れる場所となるために、希望を与える所であり続けるため、これから何かを始める、始めなくてはということでした。

第15回ランベス会議を終えて

「二人のランベス」

「二人の準備」

今年の4月頃のことだったと思います。ランベス会議の事務局から「み国が来ますように (Thy Kingdom Come)」の日本での取り組みについて報告してほしい、との依頼があり、準備して会議に

神戸教区主教 オーガスチン小林尚明

臨みました。この活動は、皆さんもご存じとは思いますが、カンタベリーとヨークの大主教によって始められたもので、昇天日から聖霊降臨日まで5人の人の導きを祈るものです。7月30日(土)のセミナー1で、議長は、英国ウインチェスターの

デイヴィッド主教、司会進行をカンタベリー大主教付き伝道と証の顧問クリス司祭（この司祭さんが後で大きな働きをしてくださいました）。報告者は、ブラジルのフランシスコ主教、東アフリカ・ブルンディのポンテン主教、そして、その後に、私が日本での取り組みをお話しました。

その内容は、2019年2月のカンタベリー新任主教研修でこの運動のことが紹介され、帰国後に日本の主教会に提案し、2020年から始まったこと。二年間は英語のものを翻訳して用いたが、やはり英国と日本の文化、生活、考え方に違いがあり、日本の信徒には理解が難しかったこと。そこで、今年は「イエス」、「賛美」、「感謝」という日々のテーマは、そのまま使い、聖書箇所、説明部分、祈りは、日本聖公会の現職主教と管区事務所の総主事で、作成して用いた。すると皆さんには理解しやすく、好評だったこと。それでも私たちは、アングリカン・コミュニオン「み国が来ますように」の運動の中にいると考えており、もうしばらくこの形で続けたい、とお話しました。報告の後、デイヴィッド主教は、「それでいいと思う。大切なことは聖霊に満たされること、5人のために祈ることだ」と言ってくださいました。この取り組み、もうしばらくこの形で進めていけたらと思っています。

連れ合いの恵子は、今回の会議でジャスティン大主教に広島のために鶴を折ってもらいたいと、手紙や広島の折り鶴、折り方の説明書、佐々木貞子さんの物語などを準備していました。「そんなこと、たいへん忙しい大主教にお願いするのは無理だ!」、と最初は思っていましたが、彼女がどこへ行くにもその一式をビニール袋に入れて持ち歩いている姿を見て、「神様、なんとか彼女の願いをかなえてください」と祈らざるを得ませんでした。なかなか機会は訪れませんでした。8月4日(木)の夜、カンタベリー大聖堂境内にある大主教の邸宅・オールドパレスでの100名を超える食事会に日本聖公会のメンバーも招待されました。立食の後、日本からのメンバーが大主教のところにご挨拶に行きますと、前述の

クリス司祭が大主教に、「み国が来ますように」の日本聖公会の担当者だと私を紹介してくださいました。大主教は嬉しそうに私に話しかけてくださったのですが、今がチャンスと「自分たちは広島で働いていたことがあり、広島の折り鶴のプレゼントを持って来ました。大主教に広島のために折り鶴を折っていただきたい。その折り鶴を広島教会に飾りたいのです」とお願いしましたところ、笑顔で一式を受け取ってくださいました。そして、大主教と一緒に歩いておられた秘書(?)の方に、いろいろ説明をしました。「これでもしかすると大主教が鶴を折ってくださり、広島に届けてくださるかもしれない」とほっと一安心しました。

「二羽の折り鶴」

8月6日(土)は、広島原爆の日でした。一人の女性から「オーガスチン主教ですね」と声をかけられ、「はい」と答えますと、「大主教から手紙と折り鶴をお渡しするように言われて、持ってきました」とステキな笑顔。A4の封筒の中を確認しますと、格調高いお手紙(2022年8月6日の日付)と二羽の折り鶴が入れてあり、それぞれに「ジャスティン」、「キャロライン」とサインがしてありました。宿舎の戻り、連れ合いと二人して大喜びし、広島復活教会へそれを届けて、教会を訪問する方々に見ていただくとう彼女と話したことでした。主に感謝。



(ジャスティン折り鶴)

第15回ランベス会議を終えて

2022 ランベス会議 ～その恵みと課題について～

横浜教区主教 イグナシオ入江 修

2020年に開催予定となっていた今回のランベス会議は、COVID-19感染拡大の影響により2年延期されて今年の7月末から8月初めにかけて2週間に亘ってカンタベリーで開かれました。

直行便でも13時間のフライトで期間中は午前3時頃に目が覚めてしまい、そのまま帰国となって5日間ほどは夜なかなか寝付けず、昼間は午後になるとどうしようもない睡魔に襲われ、帰国後1週間近く経って漸く体内時計が復旧しました。

さてここで、私が会議に参加して強く印象に残った事柄を、ご報告申し上げたいと思います。

まずはこの会議に参加させていただいた身として、ほんとうにたくさんの方々の祈りとお支えがあったということに感謝申し上げます。今回日本から参加したのは、7人の主教と、そしてその内4人の配偶者、更にはスチュワード（支援者）として2人の司祭でした。また現地在住の日本人の信徒の方や日本語通訳の皆さんを初め、現地で迎えてくれた数えきれないスタッフ・ボランティアの皆さんが、私たちを支えてくれました。

そして、世界各地のほんとうにさまざまな状況の中から配偶者を含めると千人を越える人たちがカンタベリーに集められ、祈りと黙想、そして学びと交わりの豊かな時を過ごすことができたことは大きな恵みでした。

2年延期の原因となっていたCOVID-19感染の影響はなお続き、殊に日本からの参加者にとりましては当初の予定通り帰国することが危ぶまれる状況となっていました。帰国便の搭乗前72時間以内のPCR検査で日本政府の規格に合った陰性証明がなければ搭乗できない中、止むなく帰国を延期せざるを得なくなってしまった参加者もありましたが、何とか皆さん、元気に帰国するこ

とができたことも感謝です。

今回、世界の各地よりさまざまな背景を担って主教とその配偶者の方々が参加されていたということは、自ずとさまざまな世界の実態を感じさせるものでした。そうした中から日本の状況を振り返った時、日本聖公会が抱える課題も多々ありますが、何とも恵まれた環境の中に置かれていることにも改めて気付かされました。

そのように多くの恵みをいただき、感謝の中で過ぎた2週間ではありましたが、一方では全聖公会共同体（アングリカン・コミュニオン）の抱えている痛みにも直面しました。それは、アフリカの3つの管区が会議の参加をボイコットしたということ、そして会期中にささげられた聖餐式においても聖餐に陪からなかった主教たちが少なからずいたということです。そこには、全聖公会が抱えている痛みが現わされました。共に一つの聖餐、キリストの御体と御血に陪かることさえ叶わない上に、更には同じ



(写真・大聖堂の前で)

テーブルに就いて議論することもできなかったという現実です。

それは意見の相違によるものであり、今回のランベス会議において決議されたものはなく、コールすなわち呼び掛けという形で今、最終的なものが取りまとめられているものと思います。

それは、キリストの体の裂かれた痛みであり、これからどのような連携、連帯を互いに継続し

てゆけるのか、双方が互いにその痛みを負いつつ、なお対話を続けながらどのように神さまの御心に忠実に歩んでゆくことができるのかを模索していくことになるでしょう。

これは私たちにとっての大きな宿題です。しかし、それと同時に恵み豊かな時でもありました。その意味では感謝に絶えません。皆さまのご加禱に深く感謝申し上げます。

第15回ランベス会議を終えて

2022 ランベス会議に出席して

キーワード「希望／聖性／きょうだい愛／権威／苦しみ／牧者／謙遜」などの分かち合い

東京教区主教・北関東教区管理主教 フランシスコ・ザビエル高橋宏幸

7月27日(水)から12日間に及びましたランベス会議に出席いたしました。一年ほど前から「Bishops Conversation」(準備会)がZoom開催され、各国の主教がたと備えの時を過ごしてきました。そこでは、本会議の中心聖書箇所であるペテロの手紙Iを基にしての分かち合いがなされてきました。また、「Call」という言葉が頻繁に使われてきました。そして、イギリスへ赴きますと、過去のランベス会議に比べさらに異なる文化的背景をもつ主教がたが増えたこと、女性の主教がたが増えたことに驚きと感動を覚えました。そして、準備の時から「Call」という言葉が頻繁に使われてきたことは上述しましたが、それは、この度のランベス会議は数々の決議をし、それを全聖公会に強制するというものではなく、呼び掛けを巡って話し合い、分かち合ったことをいかに活かし、行動へ繋げていくか、そのことへの呼び掛けに重きが置かれているというものでした。そして、三つの段階、即ち本会議までの準備、本会議、会議での「Call(呼び掛け)」を異なる言語や文化を持ち大切にしてきた各々の聖公会へ持ち帰り、活かしていくことを分かち合いました。そして、そのために「神とともに」「相互に学び合い」「異なる状況を生きていることを聴き合

う」というキーワードが何度も繰り返されました。

全体での会議はどちらかと言えばジャスティン・ウェルビーカンタベリー大主教をはじめ、ペテロの手紙を基に何人かの方がたからの話を聴くことに重きが置かれていましたが、7人ほどの小グループに分かれての毎日の聖書の学びが殊更印象に残っています。私のグループには日本、英国、米国、オーストラリア、インドからの主教がたで構成されていました。実際に顔と顔を合わせて話し合い、分かち合えたことで改めてAnglican Communionという違いを持ちつつも、イエス・キリストを中心とした、恰もファミリーであるという思いを強くさせられました。そこでの日々のキーワードは、主だったものを挙げますと、ペテロの手紙を基に「希望」「聖性」「兄弟愛」「権威」「苦しみ」「牧者」「謙遜」などでしたが、分かち合いや黙想の中、希望とは私(たち)の願う希望、神様から私(たち)への希望があり、前者にはともすると神様抜きでもあり得る落とし穴があることに気付かされた次第でした。また、「苦しみ」というものを思う時、もちろん避けては通れない「私(たち)」の苦しみもあるが、イエス様に苦しみを負わせているのは「誰?」あるいは「何?」という視点も置き去りにできないこ

と、そしてそれは私たちの身の回りで起こっていること、あるいは未熟さや自己中心性なども無縁ではないことを分かち合いました。このことは、ジャスティン・ウェルビー大主教の「私たちは忙しい時、心が乱れている時、神様を横に置きがちになるが、神様の飢え、渇きに気付くことの大切さがある」との言葉と重なりもしました。

さらに、「神とキリストの恵みによってこそ成し得るHospitalityには様々な形はあるが、教会はこのHospitalityは外に向けてこそ力を発揮し得る。しかし同時に、それを拒絶したり妨げ

たりするほえたける獅子の力（悪魔の業、自己利益、他人操作、個人主義、貪欲など）もあるだけにそれと闘うこと、そして福音宣教に勤しみ、キリストに在って聖霊の力を受けてこの世で生きる」という大主教の言葉には深い導きを感じさせられるものでした。その他、紙面の関係で書けませんが、難しく心を苦しめる課題、殊に「尊厳」というテーマがありました。不断の祈りの内に、真の尊厳、即ちいのちの問題、神様からのいのちに向けての奉仕への導きを深く祈り続けたいと心に刻まされました。

第15回ランベス会議を終えて

2022年ランベス会議から与えられた気づき

中部教区 主教 アシジのフランシス 西原廉太

第15回「ランベス会議」は本来、2018年に開かれるべきでしたが、アングリカン・コミュニオン内にある難題等で2年延期され、新型コロナウイルス感染症パンデミックのためにさらに2年延び、実に14年ぶりの開催となりました。私は、通訳等の補助者として、1998年、2008年のランベス会議に参加させていただきましたので、今回で3回目となりました。世界聖公会の委員会等で旧知の主教さま方や関係者、エキュメニカル・ゲストとも再会を喜び合うことができました。

ランベス会議は1867年の第1回から「決議

を行なってきました。ランベス会議決議は各管区・教区に対する法的拘束力はないものの、実際には世界聖公会の共通の判断基準となる重みをもってきました。例えば、現在でも聖公会のエキュメニカル対話、教会論の原理となっている「シカゴーランベス4綱領」は、1888年ランベス会議決議第11号です。1998年ランベス会議では、「人間の性」について激しい議論があり、その後も深刻な禍根を残したため、2008年ランベス会議は決議ができず、報告が出されたのみでした。今回のランベス会議でも決議は行なわれません



(写真・2022年ランベス会議全出席者)

でしたが、首座主教が報告されている通り、9つの重要なテーマのもとに、「ランベス・コール」という呼びかけが確認されました。

ジャスティン・ウェルビー、カンタベリー大主教は、最終の主題講演において、「ランベス・コール」自体が目的なのではなく、すべて聖公会に属する者たちが、より目に見える形で神の民となるための、すべての教会、管区、主教、そして教区に対するメッセージなのだということを強調されましたが、日本聖公会としても、今後、この「ランベス・コール」に積極的に応答することが求められます。

とりわけ、同性婚の祝福等に言及した「人間の尊厳」についての「ランベス・コール」をめぐる、ランベス会議自体の破綻も危惧される状況が起きました。しかしながら、カンタベリー大主教は全体会議において、私たちの間に深い意見の不一致があることを率直に認めつつ、最大限、耳を傾け合い、共に歩んでいくことの大切さと責任を、熱情をもって語り、対立し合う主教たちも全員がスタンディングオベーションで応えるという感動的な場面がありました。私たちは、その時、アングリカン・コミュニオンへの未来への可能性を共有していたと確信しています。

今回のランベス会議で与えられた気づきは数限りありません。中でも、ケニアの神学者、エスター・モンボ博士の黙想指導と、ローマ・カトリック教会福音宣教省長官である、ルイス・アントニオ・タグレ枢機卿の講演には胸を揺さぶられました。

モンボ博士は、「私のバケツに開いた穴」という東アフリカの「わらべ歌」を題材にして、貧しい人々や見捨てられた人々、女性たち、あらゆる権利を奪われた人々は、この穴、すなわち世界の壊れた状態から最も影響を受け、この世界的な序列が最も低くされた人々も、その穴を直し、水を節約する責任を負わされていることを指摘されました。そして、すべての主教たちに、あなた方が働く社会にある「穴」が何であるのか、そして、それを修復するためになすべきことは何かと問われました。

タグレ枢機卿は、自身が経験された出来事、

物語を豊かに語られ、私は聴きながら涙が溢れて止まりませんでした。難民キャンプでボランティアをする自治体で働く女性に、あなたがその働きを担っているのは、お役人としての義務だからなのかと尋ねたところ、このような応答があったそうです。「私の先祖も難民だったのです。私には難民の血が流れているのです。だから、ここにいる難民たちは、みな、私の兄弟たちであり、姉妹たちなのです」。タグレ枢機卿は、彼女から、他者と共に、謙遜に歩くこととは、どういうことかを学んだと言われます。「私たちが彼らに『家』を与えるのではない。私たちこそが、神がお建てになられた『家』なのです」。



(写真・協力者と)

私たち日本聖公会につらなる一つひとつの教会が、そうした「家」となっていくこと。それは、来年11月に予定されている日本聖公会宣教協議会でも、ぜひとも分かち合いたいランベス会議からのメッセージでもあるのです。



(西原廉太主教・記者会見の様子)

(2022年ランベス会議
全出席者)

第15回ランベス会議を終えて

他では代えがたい貴重な経験と物語との出会い

北海道教区 主教 マリア・グレイス笹森田鶴

何よりも、主教接手後たった3ヶ月、しかも北海道教区内の最初の巡回も終えていない状況において、北海道教区の教役者・信徒の皆様が快くこの度のランベス会議に篤い祈りと尊いお支えをもって送り出してくださったことに感謝します。他では代えがたい貴重な経験と物語との出会い、そして学びと霊性の養いをさせていただきました。

ランベス会議では深い神学的洞察に富んだ講義や講話を多く受ける機会をいただきました。その中で一つ印象的であったのが、会期中9日目に行われたランベス・コール「宗教間関係」での基調講演を担われた英国聖公会チェルムスフォード教区の主教、グーリ・フランシス＝デハカーニ博士の講演でした。

イランの教区主教であった父を持ち、イランでキリスト者として生まれ育った師は、14歳の時、1979年のイラン革命の故に自国を出国しキリスト者難民として過ごさなければなりません。また父親が主教であるということが理由だったの

か、その後兄が殺害されるという経験もされます。それにも関わらず、渡英した後の考察の中で師は、例えば十字軍の出来事がそうであるように、自身に起こった出来事はイスラム教のすべてではなく、むしろ文化や思考、歴史、科学などのすばらしい側面がイスラム教にはたくさんあることを再確認され、異なる立場の人々との幅広い関係を構築しつづけることは、ホスピタリティと寛大さに満ちた三位一体の神の、自身をささげる愛の表現方法に倣っていくことなのだ到達



(写真・グリー主教の講演)

されます。今はその関係が不完全であったとしても、より良い平和な社会を求めて行われる関係の継続は、永遠の終わりのない神の愛に基づいたものであり、他者との関わりにも常に開かれていくことでもあり、新しい共同体の構築となる、と励まされました。同時に、相手をより深く理解しようと努力し続けること自体が対話であり、イランの聖公会が歴史的にそうしてきたように、何かが起こった際に、寛大さとゆるしに基づいた友情の手を差し伸べること、それもまた行動する対話であると力強く語られました。そして、パンデミックや環境破壊、さらに信教の自由が脅かされている世界での他宗教との共同は、信仰の違いを越えたパートナーシップの構築として可能な限り追求されるべきものであり、また信仰の故に迫害されている人々がいることを決して忘れないでほしいと締めくくられました。グリー主教ご自身の寛大さが示されたこの講演に、わたしは心深く感動し、また多くの示唆と学びをいただきました。

ことにこの講演は、セクシュアリティについて言及される「人間の尊厳」のランベス・コールについて取り上げられた二日後のことでした。違う立場のそれぞれの者が同時に共にいること自体に意味を見出そうとした今回のランベス会議の決断の場所には、ご自身がLGBTQであることを公言された主教方が参加されていました。一致を求めていくために未だ緊張関係の只中にある

アングリカン・コミュニオンにおいて、この度の決断について評価を感じる一方、これから先、どれ程の痛みや苦しみをその方々は負っていかねばならないのかと心痛く、途方に暮れそうになっておりました。そのような中で、直接お話をすることのできたメアリー・グラスプール主教が、何が起ころうとも、自分たちはひたすら神を愛し、人を愛し、するべきことをし続けるだけだと語られた、忍耐強く謙遜な、そして誇り高い姿を、グリー主教の講演の際に重ね合わせて思い起こしておりました。わたしたちの課題は大きく、また道のりはまだまだ続いていくのだということ、共にあるということの重さと苦しさを、また世界の聖公会で起きていることはわたしの教区で起きていることなのだということ、強く感じさせられておりました。そして祈りの中でみ言葉に聴きつつ、考察しつづけることを通して神の導きを切に祈りたいと、グリー主教の講話を通し、改めて心に刻んでおりました。

また、会期中、女性の主教たちの夕食会が開催され、この度の97名の参加者の内、ほぼ全員が集合し、共に時を過ごす豊かな喜びの交わりの機会が与えられました。3名のスピーカーの一人として、わたし自身の主教按手前後に関わる物語を女性たちと分かち合い、多くの方から励ましのお声をいただいたことも併せてご報告いたします。



(ランベス会議に出席した女性主教)

2022年／平和を祈る礼拝**広島・長崎からの報告****コロナ禍の広島平和礼拝**

神戸教区・広島復活教会
司祭 バルナバ永野拓也

コロナ禍の折、広島平和礼拝も試行錯誤をしながら実施する状況が続いています。今年の平和礼拝を実施するにあたり、実行委員会で確認したのは開催の目的です。広島平和礼拝は、①原爆犠牲者を追悼し、世界平和のために祈る。②次代を担う人たちに原爆の悲惨さ、戦争の愚かさを伝える。③「主の平和」を学び、その実現のために活動する。一という目的で実施されてきました。開催の目的を再認識したことによって、コロナ禍でもできる形で「広島平和礼拝」を開催することとなりました。

平和礼拝の中心である「祈り」は、カトリック教会との合同の「祈りのつどい」やカトリック・プロテスタントとの合同の「8.6キリスト者平和の祈り」を行ないました。教派を超えて原爆の犠牲者を追悼し、世界平和のために祈ることを意図しています。また、6日の広島原爆逝去者記念聖餐式には、復活教会で礼拝に出席された方は50名弱でしたが、当日ライブ配信の同時視聴者数は最大42名でした。つまり、広島に来ることが叶わなかった多くの方も、ライブ配信を通して祈りを共にできたということです。

また、原爆の悲惨さや戦争の愚かさを「伝える」ために、「広島平和記念公園の碑巡り」を事前録画し、教会のYouTubeページで公開しました。広島に来ることができない方にも、「碑巡り」

を通して、原爆によって起こったこと、そして平和を願う思いによって作られた平和公園について伝えることができたと感じています。

そして、参加者全員で原爆によって起こったことを「学ぶ」ために、被爆証言をしていただきました。今年の被爆証言をしてくださった小倉桂子さんは、礼拝も共にしてくださり、その中で感じたことを話してくださいました（復活教会YouTubeページで公開されていますので是非ご覧ください）。「祈り」と「学び」を通して、キリストの器として私たちができることを考える時間となりました。

今年は聖餐式の代祷のなかで、深井渙二司祭を新たに加えさせていただきました。深井司祭は被爆当時、カトリック教会に転会されていましたが、復活教会の前身の降臨教会の最後の牧師です。また、復活教会では「私は被爆2世です」という方や、「家族を原爆で亡くしました」という話をされる方に出会う機会が多くあります。つまり、これまでの深井司祭のように、代祷の中に名前が入っていない、教会に関係する逝去者がまだまだおられるということです。



(広島「8.6キリスト者平和の祈り」)



〔「平和の祈り」広島復活教会で〕

コロナ禍によって、「平和礼拝」もこれからも試行錯誤が続くことと思います。しかしその根本は、原爆による逝去者を記念し「祈る」こと。そして、祈りを通して「キリストの平和」を見つめることのように思います。以前のように物理的に集まることが難しい状況は続くかもしれません。しかし、広島から多くの方と「祈り」を共にする方法を模索することで、「平和礼拝」をこれまで以上に多くの方と共にすることができるのではないかと感じました。そのことが、原爆によって逝去された多くの方々を記念することになると思っています。

長崎原爆記念礼拝 報告

長崎聖三一教会
司祭 バルナバ牛島幹夫

2022年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されてから77年目のこの日に、今年も長崎原爆記念礼拝を長崎聖三一教会と九州教区の協働で守る

ことができました。

この日のために祈りをこめて千羽鶴を送ってくださった方、献金を送ってくださった方、祈りの言葉を送ってくださった方、遠く離れていても同じ時間に共に祈ってくださった方、各地より参集してくださった方、全ての方に感謝を申し上げます。

礼拝の途中、11時2分原爆投下時刻をみんなで皆で黙祷を捧げ、原爆で犠牲となった人たちに思いを馳せました。また、全ての原爆殉難者の魂の平安を願い、献花をしました。

長崎聖三一教会の信徒も29名の方が原爆によって命を奪われました。1970年に原爆記念聖堂として建てられた長崎聖三一教会の礼拝堂には、原爆の犠牲となった信徒の名前を記したプレートが掲げられています。この日、プレートの前で参加者が献花をし、この29名の信徒をはじめ全ての原爆殉難者の魂の平安を祈りました。捧げた祈りが、平和への新たな誓いともなったと信じています。

記念礼拝の説教で筆者の牛島は、「平和を守るために、戦争の事実を知り、学び、伝え続けていくことが大切だ。一人一人が平和を生み出す

渦となり、平和を作り広げていこう。」と語りました。長崎聖三一教会で守るこの礼拝が、平和を生み出す力の一つとなり続けるように願います。



(記念プレート前で献花)

礼拝後には、被爆の現実を知り学ぶために、長崎平和推進協会が作成しYouTubeに公開されている被爆証言のビデオを視聴し、被爆証言に耳を傾けました。77年という時を経て、被爆体験を生声としてお聞きすることは困難になってきています。一方、被爆者の声を残していくために多くの記録が作成、公開されています。今年、長崎聖三一教会でも公開されている映像資料を

視聴することができました。今この記事をお読みの皆様にも被爆証言を是非共有していただきたいと願います。長崎平和推進協会のYoutubeから、被爆証言のビデオを視聴することができます。ぜひ、教会をはじめさまざまな場所で、だれかと一緒に被爆者の声に耳を傾けていただきたいと思います。

さて、8月9日をはさんと、長崎では平和を願う集まりが数多く催されます。この日の夜、長崎聖三一教会を会場に開催された、長崎居留地ドレミファンタジーが主催する「リング・ア・ベルコンサート」もその一つです。このコンサートは「歌で平和を届けたい」という願いのもとに開催され、今年で10回目を数えています。当教会での開催は昨年が続いて2回目です。この夜、コーラスや、ソプラノ歌手の平和を願う歌声が礼拝堂に響きました。

このコンサートでの一番嬉しい驚きは、ウクライナ正教会のポール・コロルーク司祭が来場されたことでした。コロルーク司祭は8月8日に行なわれた長崎県宗教者懇話会主催の原爆殉難者慰霊祭に出席のため来崎していたのだそうです。路面電車の中で席を譲ってくれた子どもたちに「どこに行くのですか?」と聞いたところ、「今から合唱の練習に行くところです。明日コンサートなので来てください。」と言われてこの日のコンサートを知ったのだそうです。

日本のウクライナ正教会は自前の礼拝場所を持っていないのですが、十数年前から東京教区の聖オルバン教会の礼拝堂を借りて礼拝(聖体礼儀)が守られています。不思議な縁が重なって、この夜にコロルーク司祭が、聖公会の教会で行なわれる平和を願うコンサートに導かれてきたことに、神さまのお祈りを感じることとなりました。

この日、長崎聖三一教会が、教会の信徒だけでなく地域の人達が共に平和を願う場所となったことを感謝いたします。



(被爆証言のビデオを視聴)

カトリック教会による「ヒアリング」と合同礼拝

—エキュメニカルな視点を尊重する姿勢—

エキュメニズム委員 司祭 ダビデ市原信太郎

去る7月21日、聖イグナチオ教会にて、カトリック教会の主催によるエキュメニカルな行事が行なわれた。

カトリック教会は、2021年10月以来、「ともに歩む(=シノドス的)教会のため—交わり、参加、そして宣教」をテーマに行なわれる「世界代表司教会議(シノドス)第16回通常総会」のプロセス中にあり、2023年10月の総会に向けて世界中で準備が進められている。この準備の中で、各国の司教団はそれぞれの国の意見を集約して報告書を提出することになっているが、これには他のキリスト教諸教派からの意見聴取(ヒアリング)の結果を盛り込むことが求められている。

日本の司教団は、日本聖公会・日本福音ルーテル教会・日本キリスト教協議会(NCC)の三者に対し、このヒアリングへの応答を求められ、7月の司教協議会の中でそれぞれの代表者からの発表の機会を設けられた。また、せっかくの貴重な機会でもあり、合わせて合同礼拝を実施することとなった次第である。

日本聖公会からの応答は、エキュメニズム委員会で文書を作成し、当日は教団代表として高橋宏幸主教が発表をされた。応答文書では、これまでの聖公会—カトリックの教会間対話の成果とそれに基づく実践についての提言の他、礼拝における両教会の共通の伝統と、「主の祈り」に代表される言葉の共通化の可能性などが述べられている。高橋主教は、応答文書の内容紹介の他、ご自身がフィリピンのドミニコ会修道院(カトリック)で1年間の研修をされたとき、ミサを分かち合う機会がとても貴重であったというご自身の体験を語られ、大変印象深い内容となった。

ヒアリングに続いて、聖イグナチオ聖堂に場所を移し、合同礼拝が行なわれた。2014年、カトリック・聖公会・ルーテルの三教会によって、「エキュメニズム教令」50周年記念の合同礼拝が行なわれたが、今回はそれにNCCが加わり、世界的にも例を見ない画期的な礼拝となった。

2014年の三教会合同礼拝、2017年のカトリック・ルーテルによる宗教改革500年共同記念礼拝という前例を参照しつつ、それぞれの教団の代表者による準備小委員会で式文を作成した。残念ながら、コロナ感染増加の状況下にあつて参加者数を限定せざるを得ず、広く一般に参加を呼びかけることはかなわなかったものの、それぞれの教団から十数名ずつの代表者が参列した。

聖歌・讃美歌については、カトリックのものに加え、参加三教団から1曲ずつ推薦されたものも用いられた。感染予防への配慮から、イエスのカリタス修道女会のシスターたちによる聖歌隊のみが歌うという形となったが、美しく透き通った歌声に心を揺さぶられた。日本聖公会からは、聖歌第517番「主が来られたから」を提供したが、この聖歌は当日共同司式者・説教者を務められたカトリック東京教区の菊池大司教の作詞・作曲になるもので、大司教もご自身の聖歌がこのような形で用いられたことを大変喜んでくださった。

式後は代表者による会食が催され、小生も参加させて頂いた。カトリックの司教様方に囲まれ、もっと緊張するかと思つたが、気さくな司教様方の醸し出す和気あいあいとした雰囲気の中、楽しい時を過ごすことができた。

聖公会では14年ぶりのランベス会議を終えたところであるが、この会議にあたってカトリック教会のように、全世界の聖公会が「ともに歩む」準備の期間を過ごすことができただろうかと考えさせられた。小生は、日本主教団のサポートスタッフとして現地でお手伝いをしたが、各管区から「汲み上げる」仕組みが十分でないと感じることが多かった。その点、カトリック教会のシノドスに向けた取り組みの姿勢には学ばされた。

一方で、エキュメニカルな視点を尊重する姿勢はランベス会議にも共通しており、「全教会」という視座が貴重であることを改めて認識した。とりわけ、キリスト者が少数である日本だからこその連帯感が、この一連の催しの中にも見出された。それは、私たちが「日本に生きるクリスチャン」という共通のアイデンティティを分かち合っていることによると強く感じさせられた。これ

は、ヒアリングの時間にも通奏低音として響いていたが、より明確に感じさせられたのは、礼拝や会食の時間である。司教様方が食事の席で分かち合われた話は、一人のクリスチャンとして日本社会の中で生きることの困難さや喜びについての様々なエピソードであり、これらの経験や思いは、私を含め同席したすべての人に共通するもので、とても親しみを感じる交わりとなった。所属教派や教団の違い以前に、洗礼によって共に新しい命に入れられたクリスチャン仲間の交わりとして、今後もエキュメニカルな関係がますます豊かになっていくことを願うものである。

なお、各教団の発表や合同礼拝の様子は、オンラインで動画を見ることができる (<https://www.cbcj.catholic.jp/2022/08/02/25120/>)。また、日本聖公会からの応答文書は <https://bit.ly/3ecJjkP> で閲覧可能である。

世界の聖公会の動向

- ☆ カンタベリー大主教、「不一致を超越した愛」について振り返る
- ☆ 米国デラウェア州の教会が、広告伝道を開始

管区渉外主査

司祭 ポール・トルハースト

○カンタベリー大主教、

「不一致を超越した愛」について振り返る

「今回のランベス会議で、私たちが神の御前に集い祈ることにより、全く予期しなかった驚きと神による導きを次々と目の当たりにすることができました。私たちが集まることで、真の意味での〈出会い〉が生まれ、互いから学び、不一致を超越して愛することを誓い合うことができました。それは美しく、深い感動を与えてくれるものでした。

公式・非公式によらず、様々な集いの中で、私たちは教会が何よりもまず、誠実な人間関係に

よって神の恵みの上に築かれていることを改めて学びました。私たちは何よりも「清い心で深く愛し合う」(1ペトロ1:22) ことが大切なのです。日替わりでそれぞれの管区が担当された早朝聖餐式では、多くの人が他者の喜びや苦しみに寄り添い、涙を流しました。

事前に予測されていた人間のセクシュアリティと婚姻の問題をめぐる難問によって、重大な局面が生み出されました。私たちは、聖公会の各管区の中に深刻な意見の不一致と複数の見解があることを率直に認めました。しかし、

こうした根深い不一致にもかかわらず、可能な限り互いに耳を傾け合い、そして共に歩んでいくことを約束しました。

本会議の目的は明確でした。第一に、主教とその配偶者たちの霊的生活の刷新です。多くの参加者たちが、戦争、迫害、飢饉に見舞われた地域から来訪されました。配偶者たちは、多くの教区で、資源もなく、訓練も、中には教育も受けず、そしてしばしば性的暴力の危険にさらされながら、女性たちを導いておられることが明らかになりました。

主教も配偶者も、私たち全員が最も必要としていることは、私たちがキリストのもとで神に愛され、召されている事実をあらためて認識することだったのです。あらゆるみ恵みにより、かなりの刷新がなされたようです。

2 つ目の大きな目的は、何十年にもわたって自分自身を見つめ続けてきた顔を、外の世界へ向けることでした。内なる課題に対処する最良の方法は、神を求めることです。神こそ、私たちが世界におけるミッションに仕えさせる方であり、世界に広がる圧倒的な恐怖と苦しみを知らず、私たちの内にある葛藤を明らかにさせてくださるのです。

この目的は達成されたかもしれませんが、この会議の第3ステージで「コールズ(Calls・呼びかけ)」をどのように前進させることができるのかによって、今後より明確に見えてくるでしょう。

私たちは、宣教と伝道、和解、気候変動、切迫した科学技術革命、教育、衛生、安全保障、キリスト教信徒と他宗教の人々との一致、弟子訓練、祈り、などに関する行動を約束しました。

3 つ目の主な目的は、私たちの内なる課題、特にセクシュアリティをめぐる問題について真摯に話し合うことでした。この課題は10本のコールのうちの1本で、費やされた時間は、11日間の全体会議のうち約90分でした。

私たちの間に深刻な意見の不一致があること

は疑う余地もなく、それはこのセッションの準備段階でも明らかでした。しかし、やはり神のみ恵みにより、私たちは「光の中を歩き」、深い意見の相違があっても、最大限、耳を傾け、共に歩むことを約束したのです。

会議の目的は以上です。とりわけ重要なことは、これから先、聖霊が私たちをどこへ導くかを示す兆しを確認したことです。

まず、教会論について。この会議が、聖公会のアイデンティティの長年の定義を確認する上では、明確なものです。まずアングリカニズムの存続は偶発的であるということ。つまり私たちは教会の不完全な一部であり、その性格は、カトリック的でありながら改革派的でもあります。そして教義的基本は、正しく理解された聖書、至高の信条、最小限の2つの sacrament、そして各地で適応された歴史的な主教制にあります。これが、1887-88年のいわゆる「シカゴーランバース四綱領」です。

私たちのミッションは、「宣教の5指標」によって定義されています。それは教会が共同体であり、自律的でありながら相互依存的であり、そのすべてがカンタベリーと交わりを持っているということです。自分たちが断片的で一時的な存在であることを認識し、すべての神の教会との有機的で目に見える統一を目指しています。

また、この会議では、私たちの共同生活の価値観に関しても、更なる刷新が見られました。

まず私たちは「連帯感」を強調しました。私たちは、キリストにあって互いに属しています。苦しみのエキュメニズムは、私たち共通の洗礼をもつことが基礎となっています。世界の多くの地域で、人々が殺され、教会が焼かれているのは、彼らがカトリック、聖公会、またはペンテコステ派であるためではなく、キリスト教徒であるためです。彼らの目には、私たちはすでに一つなのです。私たちの目から見ても、神の目から見ても、一つでありましょう。

また暗黙のうちに、私たちは「補完性」、つまり

できる限りローカルに根ざした存在であるべきだという原則も受け入れています。私たちは受肉した存在であり、真の受肉はキリストの受肉によって可能となり、祝福されるのですから、場所は重要なのです。

この会議で出てきた第三の価値観は、「正義」です。もし私たちが、ペトロの手紙I(レビ記を引用)の言葉を借りれば、神が聖であるように聖であるためには、それぞれの教会において公正に行動し、世界において正義を擁護しなければならないのです。

この3つの価値観は、いずれも「コールズ」の中で様々な形で示されています。ランベス会議によって、諸教会の共同体としてのアングリカン・コミュニオンが地域ごとに意思決定を行なうことを明確にしたのであれば、カンタベリーに集った主教たちが、よりキリストに近い世界のために協力し、仲間のキリスト教徒とひとつになろうとする真の願いを示したことも事実です。

私は会議が成功したと信じています。それは湧き上がるほどの合意をもたらしたからではなく、非常に分裂した世界において、憎しみを生まない意見の不一致は可能であり、多様性は問題ではなく利益であり、私たちが外に目を向け、「ミシオ・デイ(神の使命)」に身を献げれば、より有機的な一致を見出すことができることを示したからです。

何よりも、世界的な危機が私たち全員に容赦なく何度も訪れた14年間を経て、私たちはキリストの御顔に神の愛を再発見したのです。」

○米国デラウェア州の教会が、 広告伝道を開始

米 国聖公会のデラウェア州にある教会が、自宅やパソコン、車の中など、人々がどこにいても、地域の教会に招待することを目的とした広告キャンペーンを開始した。

州内の交通量の多い道路に「You're invited! (あなたは招かれている!)」というメッセージと、リニューアルされた教区のウェブサイト「dela-

ware.church」のURLを記載した6枚のビルボードが設置された。このサイトは、新しく来る人を対象に、教区の教会の一覧を提供し、最寄りの教区を探す手助けになるものである。

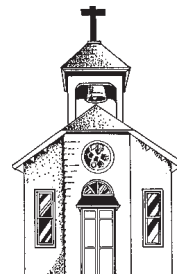
また、同じ基本デザインが25,000通の郵送用印刷物に使用され、それぞれに近隣の教区の名前、ウェブサイト、礼拝の時間帯が記載されている。教区は、このデザインをデジタル化し、ソーシャルメディアのアカウントで使用することもできる。

教区のコミュニケーション・広報担当ディレクターであるシンデ・ビンビ氏は、「コロナウイルスが教会の出席者、エネルギー、前途を減退させているのを見て、極端ではないにせよ、何か新しいものが必要な時期だと感じました」と述べている。

「私は長い間、看板のメッセージとそれがもたらす影響に興味を抱いていました。なぜ看板を使って、人々を近くの米国聖公会の教会で礼拝するように誘うことができないのか。つまり、私たちがここにおいて、ここはみんなの場所であることを知らせることができないのか、と自問したのです。」

看板には「エписコパル」という言葉はなく、印刷物の教区名の中に「エписコパル」という言葉が使われているのみである。

「私たちは、意図的にブランド化しないことを選びました。イエスとその弟子たちがおっしゃったように、『来て、見てください』ということです。」



新型コロナウイルス（COVID-19）に関連する 各教区の対応

北海道教区 原則として礼拝（公禱）を行なうが、各教会で判断

- 教会での礼拝は主日・週日いずれも定時に行ない、誰でも参加可能。
- 感染対応をこれまで通り実施しながらも、教会活動、ことに礼拝における実践を可能な範囲で少しずつ拡大していくことを勧める。（あくまでも「可能な範囲で」）
- 礼拝に関して不安や恐れがある信徒は自宅で礼拝を守ってもよい。

東北教区 原則として礼拝（公禱）を行なうが、各教会で判断（休止は主教に連絡の事）

- 十分な感染対策をすること。（衛生用具の再点検実施の事）
（十分な換気、消毒、場合によっては入場者制限、飲食の休止、地域状況にも留意する、外部に呼びかけるプログラムは感染状況勘案の上決定すること。）
- 葬儀は十分な感染予防対策の上で実施。
- 引き続き警戒は緩めないこと。（No.9 遵守のこと）
- 司式者のみ2種陪餐とし、奉仕者・会衆は1種陪餐とすること。
- 堅信受領者総会開催については十分な感染予防に徹すること。

北関東教区 礼拝（公禱）の再開または休止

- 各教会・礼拝堂で協議し、地域社会と共同体の状況により適切な対応を講じる。

- 葬儀は十分な感染予防対策の上で実施。

東京教区 礼拝（公禱）の公開または休止

- 感染状況の懸念が深まる中、各教会・礼拝堂での礼拝の公開などは、感染防止の対策の上、それぞれの状況にあわせて実施。
- 幾つかの教会・礼拝堂は公開の礼拝を休止している。

横浜教区 礼拝（公禱）の公開

- 「礼拝指針」（更新・2022年6月版）の徹底。
- 「新型コロナウイルス感染者発生時の教会対応ガイド」の順守。

中部教区 礼拝（公禱）の再開

- 主日及び週日の礼拝再開、休止については『礼拝再開に関するガイドライン』に基づき各教会で判断。
- 緊急事態宣言等下のエリアにある教会は原則礼拝等休止。
- 聖歌歌唱及び二種陪餐再開については主教に報告の上実施。

京都教区 各教会で判断

- 感染者が増加しており、引き続き感染防止対策は行う。
- 主日礼拝の方法は各教会の判断としている。

大阪教区 礼拝（公禱）の再開

- 各教会の事情には違いがあるので、各教会の判断を尊重する。
- リモートの活用などに引き続き取り組む。（リモートが使えない方へ配慮しつつ）

神戸教区 礼拝（公禱）の再開

- 教区自粛基準（4/4改訂）に従って礼拝を再開。

九州教区 礼拝（公禱）の一部休止

- 無理に主日礼拝に来ることをお勧めしない（体調の悪い方・公共の交通機関で教会に来られる方など）。

沖縄教区 礼拝（公禱）の再開

- 引き続き十分な感染症対策を行なう。（マスク着用、手指消毒、換気、会衆席の間隔確保等）
- 主日礼拝へは無理に出席しない（体調不良、濃厚接触等）。
- 陪餐（一種、二種）、聖歌の歌唱等は各教会で判断。

管区事務所 勤務体制の変更

- 4/4より当面の間、平日（月曜日～金曜日）10:00～17:30の勤務時間短縮体制。

- * 毎月1回、情報更新をいたします。管区のHPにも掲載（英語版もご用意）しておりますので、ご活用ください。

（2022年9月20日現在）



2023年日本聖公会宣教協議会

ぶどうの枝だより Vol. 3

“皆様と想いを分かち合い、共に祈り、つながるプロセスを大切に” しつつ歩みを進めている2023年日本聖公会宣教協議会。6月～8月の活動の様子を「ぶどうの枝だより第3号」としてお届けいたします。

「第3回ぶどうの枝分科会」

6月9日(木)、ぶどうの枝分科会～原発問題プロジェクト編が、正義と平和委員会・原発問題プロジェクトのみなさまと共にオンラインで行なわれました。はじめに長谷川清純司祭(原発問題プロジェクト長)と池住圭さんからお話を伺い、後半は3つのグループにわかれて分かち合いをしました。この分科会が「原発のない世界を求める週間」の期間中(6月5日～11日)に行なわれたこともあり、オンラインフォーラム「原発はやめようよ」の公開プログラムには宣教協議会実行委員も参加させていただき、原発に関わる問題への理解を深めつつ話し合うことができました。

グループの分かち合いでは、原発の問題に日本聖公会として長くかかわって来ていること、(公開プログラム・森松亜希子さんのお話から)「人権」「日々の生活」「いのち」の大切さ、「いのちを守る権利」について、そして原発の問題がいかに私たちに見えにくくされているか、などが話されました。2011年の事故から10年以上が経ちますが、未だ何も解決せず、これからもこの問題に継続的に関わってゆく必要があることをあらためて感じることとなりました。

「ぶどうの枝協議会」

8月22日(月)～23日(火)、インマヌエル新生教会(東京教区)を会場に「ぶどうの枝協議会」が開かれました。全国11教区の宣教担当者、管区諸委員会の代表、宣教協議会実行委員、管区事務所総主事・宣教主事、首座主教、総勢

35名が一堂に会しての会議となりました。

(1名は都合によりオンライン参加)

コロナ禍のため、これまでのぶどうの枝分科会や実行委員会はほぼ全てオンラインで行なわれてきましたので、実行委員でさえ全員が一堂に会するのは初めてのことでした。こうして全国からみなさんが集まり、顔を合わせて協議会を行うことができたことは、本当に大きな恵みであったと感じています。

協議会は開会聖餐式をもって始まりました。(司式：越山哲也司祭、補式：卓志雄司祭、説教：磯晴久主教) 礼拝の中で“2023年宣教協議会のための祈り”が献げられました。続いて

4つの発題、全3回のグループシェアリング、全体での分かち合いが行なわれました。



(開会聖餐式説教：実行委員長 磯主教)

発題Ⅰは、西原廉太主教によるランバス会議報告でした。この8月の開催の様子をスライドを用いて紹介、これまでの流れと現在の課題についてお話くださいました。また「ランバス・コール」が宣教の指針として、わたしたちへの呼びかけとして発信されるということをお伺いしました。

発題Ⅱは、2020年末に始動して以来の宣教協議会実行委員会のこれまでの歩みについて、また話し合ってきたテーマや主題聖句についての紹介、実行委員会で検討してきた5つのトピック(①み言葉の分かち合い ②10年の実り ③宣

教協働区・伝道教区制 ④原発・環境問題 ⑤コロナ禍の教会) についてお話をさせていただきました。

発題Ⅲは長谷川清純司祭のお話。スライドを拝見しながら、これまでのプロジェクトの歩みと活動、また直面している様々な問題について伺いました。



(発題Ⅳの様子)

最後の発題Ⅳでは、今回の会場となったインマヌエル新生教会の前身である3つの教会(東京聖マルチン教会・池袋聖公会・練馬聖ガブリエル教会) 出身の信徒さん方(各1名) から、この教会が生まれるまでの歩みとそれぞれの思いを、「神が共におられ(インマヌエル)『新』しく『生』まれた『教会』の物語」として伺いました。それぞれに違う状況を抱えながら一つの教会になってゆくプロセスを、そのご苦労や悩みを信徒の方々から直接伺うことができとても良かったとの意見が多く聞かれました。

2日目朝は、テゼの黙想形式の礼拝から始まりました。静かな歌と音楽の中で、また沈黙のうちに思いを巡らせる時間をゆったりと持った後に、グループシェアリングに入ってゆきました。発題を受けての感想や大事に受け止めた事柄についての分かち合いから、それらを宣教協議会のプログラムとしてどう立ち上げてゆくのか、熱心な話し合いがなされました。最後にそれらを全体で分かち合ったのですが、それぞれ様々に違った視点からアイデアが出されてゆきました。

2日間にしては本当に盛りだくさんの会議でしたが、つごう3回のグループシェアリングをメンバーを変えずに行なったことで、より深い話し合いができたように思います。

このぶどうの枝協議会は、2023年11月に行な

われる予定の宣教協議会の具体的なプログラムを提案し、具体的な道筋を立てることを目的として行なわれましたが、本当にたくさんのアイデアが出されたことは感謝です。これらをまとめることは決して簡単ではありませんが、みなさまのご助言をいただきながら実行委員会でじっくり話し合い、よりよいプログラムに向けて準備をしてゆきたいと思います。

今後いくつかの分科会を予定しておりますが、少しでも多くの方々「宣教」について共に考えを分かち合えますようお願いしております。

みなさま、どうぞよろしくお願ひいたします。



(閉会礼拝後、集合写真)

[2023年宣教協議会のための祈り]

信頼と和解、平和と正義の源である主よ、人間の愚かさと誤りにより、今なお戦争、弾圧、差別、分裂の絶えないわたしたちの世界を顧みてください。

日本聖公会宣教協議会へと向かう歩みを祝福し、わたしたちがこれまでの歩みを振り返り、その実りを感謝することができますようにお導きください。そして、新たな歩みの出発点とすることができるよう、わたしたちの足元を照らし、知恵と力をお与えください。

あなたは、み子イエス・キリストを通して、すべてのいのち、とくに小さくされている人々と共に生きることの大切さを示してくださいました。どうかぶどうの木である主につながり、生きとし生けるものの「となりびと」となる道を歩むことができますように、わたしたちをお導きください。

主イエス・キリストによってお願ひいたします。
アーメン

管区事務所
〒162-0805
東京都新宿区矢来町65番
電話 (03)5228-3171
FAX (03)5228-3175

日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku
Tokyo 162-0805, Japan
Tel. 81-3-5228-3171
Fax. 81-3-5228-3175

日本聖公会各教区・教会・伝道所・礼拝堂 信徒・教役者のみなさま

安倍元首相の国葬に対する反対声明の送付について

＋主の平和がありますように。

このたび、正義と平和委員会の憲法プロジェクトを中心に、首座主教・正義と平和委員長・管区事務所総主事名で「安倍元首相の国葬に対する反対声明」を発出いたしました。

連日の報道でも問題になっています統一協会と政治の関係をはじめ、安倍元首相が行ってきた有事法制や原発の再稼働、特定の学校法人への優遇などその政策への検証がなされず、国葬を行なうことによって、それらがうやむやにされてしまうと懸念するからです。そして何よりも、聖書に示されている「あなたには、私をおいてほかに神々があってはならない。」（出エジプト記 20：3、聖書協会共同訳）という教えに反し、逝去者の神格化につながると、思想・良心の自由を保障する憲法第 19 条に反するものだと考えます。故人の魂の平安を祈ることは否定されるべきものではありませんし、声明に記された考え方を信徒・教役者のみなさまに強要するものではありませんが、同じように国葬も強要されるべきものではありません。

すべての人のいのちが神さまから等しく与えられた大切なものであり、教会はことに弱い立場におかれた人々、小さくされた人々、痛みを覚える人々のいのちに寄り添うことがその使命だと信じています。それゆえに、特定の個人を特別に多額の税金を用いて国葬とすることに反対の立場を表明するものです。

教会で政治的なことを語ることに違和感を覚えるという声もありますが、政教分離という考え方は、かつての国家神道のもとに戦争へと邁進した過去の反省に立ち、政府が特定の宗教を強要したり優遇したりしないようにするという考え方です。それぞれの宗教の信仰に基づいて、すべてのいのちを大切にするという視点から、声を発することを制限するものではありません。どうぞ、みなさんの教会の中でも、いのちにかかわる様々な課題として捉え、祈りの内に覚え、話し合う機会をお持ちいただければ幸いです。

2022年9月2日

日本聖公会管区事務所 宣教主事 司祭 卓 志雄
総主事 司祭 矢萩新一

管区事務所
〒162-0805
東京都新宿区矢来町65番
電話 (03)5228-3171
FAX (03)5228-3175

日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku
Tokyo 162-0805, Japan
Tel. 81-3-5228-3171
Fax. 81-3-5228-3175

安倍元首相の国葬に対する反対声明

2022年9月2日

私たち日本聖公会は、以下の観点から9月27日に予定されている安倍晋三元首相の国葬に反対します。

1. 国葬に法的根拠がない中、国会の審議を経ずに閣議決定したことは、民主主義の根幹を揺るがします。また、「国葬令」の失効の経緯を顧みることなく国葬を強行することは、「国家主義」の再興を意図しているとしか思えません。法治国家、民主国家として、国葬を実施すべきではありません。
2. 政府は、国葬当日に地方自治体や教育委員会などに弔意表明の協力を求めないとしています。しかし、国葬によって国民全体の敬意、弔意を表すという位置づけは変わりません。その上、全国の都道府県や教育機関等に弔旗、記帳台、献花台などが設置されれば、国民の弔意が事実上強いられることになり、私たちの思想・信条・信教の自由が侵害されます。また、特定の故人を美化する国葬の国民への影響、殊に子どもたちや青少年への影響に多大な懸念を抱きます。
3. 政府は、国葬にすることの根拠の一つとして、安倍元首相が各分野で大きな実績を残したとしています。しかしながら、任期中に行った集団的自衛権の行使を容認する閣議決定、安全保障関連法や特定秘密保護法、共謀罪法の制定については、平和憲法を逸脱しているとの批判を免れません。また、権力の私物化として大きな問題になった森友学園、加計学園、「桜を見る会」などの真相が明らかにされないまま不問に付されようとしています。さらに、今回の襲撃事件の捜査が進む中、長い間自民党がさまざまな形で関わって来た世界平和統一家庭連合（旧統一協会）との関係が明らかにされつつあります。先ず、これらの徹底した解明、検証をすべきです。また、安倍元首相の任期中の実績を云々するのであれば、公平性や透明性を担保するためにも第三者機関を設置し、客観的な評価に委ねるべきです。
4. 政府は国葬に、今年度予算の予備費から約2億5千万円を支出することを閣議決定しました。しかし、この中には国内外から参列する要人の警護費用や会場周辺の警備費用などは含まれておらず、総額を示そうとはしていません。コロナ禍もあり、国民の多くが苦しい生活を送る中、このような税金の使い方は決して容認出来るものではありません。

このように、さまざまな問題をはらむ中、特定の人間の国葬を強行することは、民主主義の根幹を揺るがす動きであるとともに、聖書が警告する「人間の神格化」につながるものと危惧し、看過することはできません。ここに、わたしたちは、安倍元首相の「国葬」に強く反対します。

日本聖公会 首座主教	主教 ルカ	武藤 謙一
正義と平和委員会・委員長	主教 ダビデ	上原 榮正
管区事務所総主事	司祭 エッサイ	矢萩 新一

東京教区正義と平和協議会 平和のつどい

ウクライナの平和を祈る

ウクライナ正教会

ポール・コロルーク司祭とともに

ロシアによるウクライナ侵攻はウクライナだけでなく世界の平和にも暗い影をおとしています。ウクライナ正教会のポール・コロルーク司祭とともに、ウクライナの現状を知り、平和のための祈りの一時を持ちます。

本つどいは7/16(土)に予定されておりましたが、ポール司祭の新型コロナウイルス感染症が判明したため延期となりましたが、会場での開催が難しいため、Web 開催とさせていただきます。



10月8日(土) 14:00~15:30 (Zoom 開催)

ウクライナの平和のための祈りと

ポール・コロルーク司祭のお話し

講演会后、東京教区正義と平和協議会が行われます。

<https://us02web.zoom.us/j/89661532274?pwd=SEZtVHZHbDZnd3Q0Rmx5Z1N2V01pUT09>

ミーティングID: 896 6153 2274 バスコード: 663985

参加申し込み(メール mission-sec.tko@nssk.org)

問い合わせ先 書記: 森田 (070-2652-6014)



ウクライナのための祈り

正義と平和の神よ、
わたしたちは今日、ウクライナの人々のために祈ります。
またわたしたちは平和のために、そして武器が置かれよう祈ります。
明後を恐るすべての人々に、
あなたの恵みの雲が降り注いでくださいように。
平和や戦争も支配する力を持つあなたが、知恵と愛と思いやりによって、
命に満ちた御心を遣わされますように。
そして何よりも、危険にさらされ、悲劇の年にいる
あなたの大切な子どもたちも、あなたが抱き守ってくださいように。
平和の雲、まひなく、キリストによってお願いいたします。
アーメン。

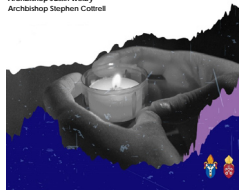
ジャスティン・ウェルビー大主教
スティーブン・コッレル大主教



A Prayer for Ukraine

God of peace and justice,
we pray for the people of Ukraine today.
We pray for peace and the laying down of weapons.
We pray for all those who fear for tomorrow,
that your Spirit of comfort would draw near to them.
We pray for those with power over war or peace,
for wisdom, discernment and compassion to guide their decisions.
Above all, we pray for all your precious children, at risk and in fear,
that you would hold and protect them.
We pray in the name of Jesus, the Prince of Peace.
Amen.

Archbishop Justin Welby
Archbishop Stephen Cottrell

日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nssk.org/province/>

☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメール、また郵便でお寄せください。